

# 伊吹神社社記よりみた安政5年（1858年）

## の宇和島におけるコレラ対策と治療

萩山正治

### 一 要 旨

伊吹神社社記にオランダ出島医師ポンベの長崎奉行あてのコレラ対策の意見書（史料Ⅰ）と幕府よりだされたコレラ防除に関する御触れ書（史料Ⅱ）がみつかったことと、安政5年に発生したコレラ流行に宇和島藩ではポンベの治療法を参考にして多大な治療効果をあげ流行を最小限に食い止めたことを報告した。

最近、伊吹神社15代宮司渡辺正氏より、格別のご配慮を頂き史料の提供をうけたのでその解明と時代的背景について考察した。

元和の頃より書き継がれてきた社記（図Ⅰ）には安政5年から6年にかけて悪病流行（コレラ病）につき多くの加持祈祷が行われた記載がみられる。その中に（図Ⅱ）、和蘭海軍2等医官、ウエイエル ポンベ ファンメードルフヲナルトから長崎奉行（当時は岡部駿河守）に宛てたコレラに対する衛生行政の実施をうながす意見書があり、通訳したのは志筑龍太郎、西慶太郎である。内容は高位貴人と中人以下庶民とに分けてコレラ対策をのべてあるが、要は住居の風通しをよくし、香気あるもの使用し、飲食は生物をさげ、腹部を温かくすること、又龍腦麝香という薬を使用するとよい旨幕府医師高須松齊、同松膏等によって奉上げられた。以下河野伝前伊達事務所長による史料の解説を示す。

### （史料Ⅰ）

安政五

第五若下痢相覚候ハハ直様療養之手当致猶豫致間敷事

右之通申上候談合ニ而私共を龍香老歇たるコレラ病除去為御賢慮可被為在儀奉存候

和蘭海軍方第二等医官

日本宛理学

ウエイエルポムベファン

メードルフヲナルト

長崎 御奉行様

右之通和解差上申候以上

志筑龍太郎

西慶太郎

午六月

コレラ疫癘ヲ防除スル要方

一流行病ノ人々へ傳染スルヤ口鼻ノ呼吸息ニ隨テ腹中へ

入り血液へ交リ一身ヲ循環スル故ニ病根トナル

一御住居ハ弘クシテ風氣左右前後ニ吹透ス所ヲ選フヘシ

狭クシテ風氣ノ透サス処ハ天地間硝氣共ニ清涼ノ精ヲ閉閉シテ濃厚ニナレハ必臭氣ヲ催シ腐敗氣ニ變スルトキハ必病症ヲ發ス

一高位貴人ハ常ニ薰物ヲ焚キ香氣ヲ嗅キ頭腦精神悠映ヲ覺ル程ニ頭部輕クナルヲ良トス又ハ龍腦麝香其外香氣アル丸散ヲ舌上ニテ味ヘルモヨシ又ハ香

袋ヤウノモノヲ常ニ弄スヘシ

一中人以下庶人ハ樟木蒼朮艾葉等ノ香氣アル草木ヲ

焚キ又ハ一晝夜ニ數度酢ヲ火上ニ点シ家内ノ蒸暑氣清涼ニスヘシ

一飲食ヲ慎ムニアリ野菜ハ新キヲ選ヒ一切輕ク湯煮シ

タルモノ其他芥子胡廣紫菀柚等ノ香ヘアルヲ專用スヘシ魚類油氣少キモノ鵝卵類ハ良シ野菜魚類共ニ久シク塩漬ケ又ハ天日ニ乾シタル至テ惡シ惣シテ

腹中温煖ナルモノヲ選フヘシ服ハ寒冷ナルモノ必不可食

一藥用ハ大小便ノ快利ヲ第一トシ次ニ龍腦麝香

惣シテ香気アル藥朝夕用ヘシ頭腦開キ快ク思ヒ  
輕キヲ覺ルヘキヲ專用トス  
一當春於長崎表コレリ疫流行ニツキ在留ノ蘭人ヨ  
リ  
申上候一冊奉入御覽候  
午八月十二日

高須松齋 清忠  
同 松亭

(史料II)

御目付へ

近頃長崎邊より相起り江戸辺迄疫痢様にて吐瀉烈  
敷難時ニ取詰候様之病症致流行  
人損も不少趣相聞御国元之義も御不安  
倍々被 思召候処右防方之義書付被為入  
御手ニ候趣ニ而被相下并別紙御直書寫  
共被相下候旨申來候間御家中一統末々迄  
承知候様各より御支配へ伝達可有之候  
別紙之通被 仰出候間御承知之  
上早々御順達可有之候以上

和田石見

松浦上総殿  
二宮日向殿  
西村丹後殿

覚

此節流行之暴瀉病志表療治方  
種々 候得共其内素人心得へき法を身  
預し如是を防くニハ冷す事なく腹ニハ木綿を巻大  
酒大食を慎み其外こなれ難き食  
物を一切給中間敷くもし此病催し候ハハ早く寢床  
に入りて飲食を慎み惣身を温め  
たた記す芳香散といふ藥を用ゆへし是  
のみにて治するもの少からず 又惣身  
冷る程に至りしものハ燒酎壹貳合之中に龍腦又は  
樟腦壹貳玉を入れあたためて木綿  
の切ニひたし腹并手足へ靜ニすり込芥子泥を心下  
腹并手足へ小半時位づつ度々張るべし  
芳香散

上品桂枝 細末 等分  
益智 細末  
(龍腦の異名)

乾 姜 細末  
右調合致し壹貳玉つつ時々用ゆへし  
芥子泥

からし粉 等分  
温飽粉

右あつき<sup>じこ</sup>酸にて堅くねり木綿切のはしに張る事但  
間に合さる時ハあつき湯にて芥子粉はかり  
ねり候てもよろし

別法

あつき茶に其三分一燒酎を浸し砂糖を少々  
加へ用ゆへし但座敷を閉布木綿等にて  
燒酎をつけ頻りに惣身をこするへし  
但手足の先き并腹冷る所を温鉄又ハ  
温石を布につつみて湯をつかひたる如き  
心持ニなる程ニこするも又よし  
右者此節流行病甚敷諸人難義致候ニ付  
其病氣に抱ハらず早速用ひ候て害なき  
藥法を諸人為心得無<sup>レ</sup> 屹度相違<sup>レ</sup> 候事

八月

一コレラ侵入とその流行状況一

日本に初めてコレラが侵入したのは1822年(文  
政5年)の夏であった。(1)中国、朝鮮經由で侵  
入し東に向ったが箱根の手前でくい止められ江戸  
には侵入しなかった。(2)1858年(安政5年5月)  
に我国は2度目のコレラ流行に見舞れた。(3)上  
海に寄港後長崎に入港した米艦ミシシッピー号の  
船員がコレラをもちこんだ。

この流行は西日本に広く流行し2カ月後には江  
戸に侵入し各地に死者多数をだした。江戸では約  
3万人の死者をだした。この時の流行は青森まで  
及び(流行の北限)(4)、安政7年まで流行が続  
いた地域があったがこの年に流行は全国的に終息  
した。江戸初期より年貢米の運送の為航路が整備  
され、海上交通は活発で江戸でも青森でも沿岸部  
より流行が始まった。青森では若狭の船より流行  
がもたらされた。

この頃、長崎ではオランダ医ボンベが活躍して  
おり、彼は安政のコレラ侵入を予測し、その治療  
と対策の準備を行っていた。ボンベは長崎奉行あ  
てにたびたびコレラ対策についての意見を具申し  
ているが、今回の史料もそのうちの1つと考えら  
れる。

長崎におけるコレラ患者発生状況は、ポンペの報告によると、人口6万人の長崎市の患者数は1,583人でこの内ポンペ達が治療したのは601人で、死亡221人で死亡率36.4%であった。これ以外に日本人医師による治療は982人で、死亡546人で死亡率55.5%であった。(3)

ポンペのコレラ治療の処方には硫酸キニーネ及び阿芙蓉を与え、温浴を施さしめるものであった。コレラ菌の発見(1883年コッホ)前のことで今日の治療と比較し隔靴搔痒の感があるが、対照療法としてキニーネがよく処方されていた。食品衛生として魚類、野菜の生食を一切禁じ九月下旬には長崎のコレラは終焉した。

#### 一 宇和島におけるコレラ流行一

宇和島藩の公式記録である監山公記よりコレラに関する記述をみると安政5年8月と9月に詳細な記録がみられる。(5) 8月には藩の江戸屋敷内にも市中よりコレラが伝染した。藩としてもコレラ対策の情報収集は充分行っていたようで、史料(Ⅰ)と(Ⅱ)も掲載されており、さらに治療方法についても詳しくポンペの治療法等についてのべている。9月に入ると国元の宇和島より戸島にコレラ発生の知らせが届く。宇和島藩のとったコレラ対策をみると、安政5年9月に戸島に悪病流行し死者多く、浦医の東水が治療に当たったが、力及ばず、応援依頼あり、谷忒堂、清恭、周伯、熊崎實哉の4名に出張命令が下った。治療中東水、熊崎の2名はコレラに感染したが、幸い回復。清恭は病気を理由に出張を辞退し後に合力米没収処分を受けた。医師にとっても命がけの出張であった。治療としてポンペの説による第1水薬のラウタ30滴、ホフマン15滴、薄荷油3滴を2合半の水に混和し1時間毎に3度用いた。(カラシ粉を温めて腹部、手足に貼布した。)さらに効果のない場合には漢方薬も使用した。ラウタ又はホフマン液にキニーネが入っていたものと考えられる。(6)

周伯らの帰城報告によると、9月14日から120人の患者を治療し、その内コレラと診断したものの53人で6人が死亡した。死亡率11%と特殊死亡率を考慮していない単純な計算であるが長崎のコレラ死亡率と比較しても極めて低い。喜島にも伝染し12人死亡、周伯らの治療が間に合わずに戸島で

死亡したもの13人を含めて総死亡者数は78人であった。10月上旬には流行は終焉した。出張の医師にそれぞれ報償金が支払われた。

#### 一 考 察 一

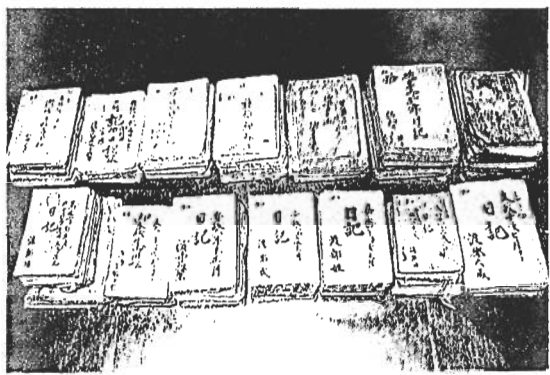
伊吹神社に何故このような史料が存在するのか詳細は不明であるが、当時の神社の地域へ果す役割として、誰にでも出来る簡便なコレラ予防と治療法を伝えることで、庶民の不安や恐怖を静めることが出来たのではないかと考えられる。コレラと神社との関係を示す史料として、江戸寺社奉行の御触れがきがある。(1) コレラでパニックに陥った江戸庶民が、ミコシをかついでさわぐ為、各神社にミコシの借り出しの申し入れがあっても厳禁する旨通達している。宇和島では、九州からの交易船の基地となっていた戸島に最初にコレラが侵入した。(6) 藩医の活躍で流行を戸島、喜島地域の最小限に食い止め、10月には流行の終息を報告している。他地域でおきた市民のパニックもなく宇和島藩は公式な記録でみる限りコレラ流行を最小限の被害でおさめることに成功したといえる。一方庶民の記録である伊吹神社社記には安政6年の頃にも、悪病流行につき多数の加持祈祷が行われた記録があり、戸島以外の沿岸部への流行が疑われる地名もあり今後の調査を続けたい。

安政5年のコレラ流行は昨今のO-157流行と比較しても興味深い。コレラの歴史は単なる医学の歴史だけでなく、社会の歴史でもあることを強く感じた。史料の提供、解説にお世話になった伊吹神社宮司渡辺正氏、前伊達事務所長河野伝氏、清水英先生、順天堂大学医史学教室酒井シズ教授に深甚の謝意を表します。

- (1) 山本俊一 日本コレラ史第2章安政時代 16-19頁 東京大学出版会 1982年
- (2) 大滝紀雄 神奈川のコレラ 5-6頁 日本医史学雑誌38巻1号 1992年
- (3) 長崎医学百年史 ポンペの衛生行政 54-58頁 長崎大学医学部 1961年
- (4) 松木明知 幕末の弘前藩における痘瘡流行と牛痘種痘普及の実態一豪商金木屋又三郎日記による研究一 71-73頁 日本医史学雑誌43巻1号 1997年

- (5) 監山公記 安政5年112卷8月 20-28頁、  
113卷9月 14-29頁
- (6) 清水 英先生の話より

図1



元和の頃より、代々書き継いできた  
伊吹神社社記（日記）

図2



ボンへの意見書

